

デジタルカメラを用いた美術科授業の実践

美術科 栗原 理恵

1 はじめに

昨年度までの研究では、「未来に生きる美術文化を自らに培う授業づくりー表現を喜び、鑑賞を楽しみ、豊かな創造性と感性を培う授業の実践ー」をテーマに、主体的に学んだことを他の学習活動や日常に生かし、またそこから得たことを美術科の学習に生かしていく生徒の育成に取り組んだ。少しずつ、主体的に取り組む生徒が増え、美術科における課題も変容してきている。しかし、依然変わらぬ課題もあるだろう。

そこで、生徒の実態を再度確認し、新たな課題を探り、今年度の研究課題設定のための一つの取り組みとして、いくつかの学校でも行われているデジタルカメラを用いた写真表現の題材を通して、美術科の学習活動としてどのような実践が有効であるかについて考えた。



図-1 写真撮影中の生徒

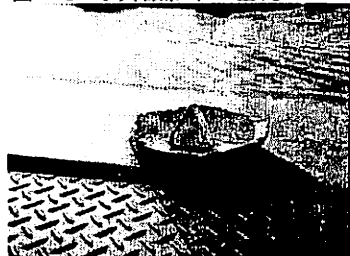


図-2 撮影された写真

2 本校美術科における課題

学習指導要領の改訂にあたって、美術科の目標には「美術文化についての理解を深め」が加えられ、美術を愛好する心情と感性を育て、美術の基礎的な能力を伸ばすとともに、生活の中の美術の働きや美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養うことを一層重視するという方向に改善が図られている。また、平成20年1月の中央教育審議会答申では、小・中・高等学校の図画工作、美術、芸術（美術・工芸）の課題として、次の5点が指摘されている。

- ・感性を働かせて思考・判断し、創意工夫をしながら表現したり作品を鑑賞したりするという一連のプロセスを働かせる力を育成すること
- ・子どもたちの興味や関心の高まりを資質や能力の向上に生かすような指導の改善を図ること
- ・生涯にわたって美術に親しみ、生活や社会に生かしたり、豊かにしたりする態度の育成をはかること
- ・感じ取ったことをもとに、自分の思いや考えを大切にしながら、自分なりの意味を発見するなどの鑑賞の学習の充実
- ・我が国の文化等にかかわる学習を通して、その継承や創造への関心を高めるとともに、諸外国の文化のよさを理解すること

この5点の課題と我が校の生徒の実態とを照らし合わせて課題を探る。

一点目の「感性を働かせて思考・判断し」に関しては、与えられた課題に簡潔な解答を示そうとするあまり、自分の感じ取ったことを明確にして追求するよりも周囲の評価する表現方法を選んで制作しようとする生徒が見られることが挙げられる。また三点目の「生涯にわたって美術に親しみ、生活や社会に生かしたり、豊かにしたりする態度の育成」に関しては、自己評価カードにおけるふり返りにおいて「美術では、絵の描き方や立体（ライト）のつくり方を学んだ」「つくことは好きだし美術の授業は大切だが、将来の仕事にしようとは思わないのでさほど必要とは思わない」と回答する生徒が見られることから、美術科の学習内容が、絵の描き方・もののつくり方を学ぶものであるという理解にとどまっている生徒もいることが伺える。これらは、学年が低いほどその傾向が見られた。美術

の学習では、ものの見方や考え方を深めること、形や色などに注目し、それらによるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわる態度をはぐくむことが重要であり、生活を美しく豊かにする美術の働きを実感させる学習活動が大切であろう。そのため、四点目の「鑑賞の学習の充実」に引き続き重点を置いていくことも、作品や自然の美しさなど生活の中にある美的な感動から自分なりの意味を発見する体験や経験のために有効ではないか。

これまで、立体の制作を多く行い、様々な角度からものを見つめ、主題を考えながら表現する題材や、奥行きを感じながら絵画に表現する題材などに重点を置いて取り組んできた。今年度は、表現と鑑賞の両面から感じ取ったことを元にさらに表現するというサイクルを短時間のうちに繰り返せる題材を用いることとした。具体的には第二学年ではデジタルカメラを用いて光と陰影を意識した作品制作及び鑑賞、また、第三学年は卒業制作としてのアニメーション制作という授業実践を行った。



図-3 APAの方達と行った授業

特に、第二学年では、社団法人日本広告写真家協会（以下、APA）の教育普及関係の取り組みである「美術授業にカメラ」の協力を得ての授業を行った。これは、カメラによる写真表現の自らの感性による「発見即表現」できるという特徴を生かし、カメラを図工・美術の授業に取り入れることによって、全国の子ども達が見る力・感じる力・つくり出す力を培っていくことをねらいとして企画された公募展へとつながる。参加希望団体には生徒一人あたり一台のカメラがレンタルされ、指導者（プロの写真家）がボランティアで学校を訪れ、実際の指導に当たるといった情熱的な取り組みが行われていることを全造連関係者からお聞きして、この機会を活用した。

3 実践例 『図工・美術授業にカメラ』始めよう、カメラの授業

1 題材名 「熱と炎でつくる ―益子焼にふれよう―」

2 題材設定の趣旨

私たちの住む栃木県には、日光彫、大田原の竹工芸、烏山の和紙、小山の間々田ひもなど、伝統工芸品がいくつもあるが、初めは、日常の生活の中から必要に迫られて道具として生まれ、より美しく使いやすくという、人の内なる願いによって工芸品まで高められたと考えられる。我が校では、そのような人々の思い



図-4 益子焼の湯飲み茶碗

に関心をもち、自分なりに受け止め、継承し、新たな文化をつくり出そうという意欲や態度を育成することをねらいとして、実際に制作し鑑賞する題材を設定している。

第二学年では益子焼を題材に選んでいる。純粋に材料の質感や触感を楽しむことができ、腕、掌、指先を総動員する必要がある、様々な角度から見つめながら制作することのできる焼きもの用の粘土は、小学校の時に使用した経験のある紙粘土（樹脂粘土）と違い、肌に吸い付いてくるような質感とポロポロとこぼれていく脆さを併せもつ。扱いに慣れるまで感覚を研ぎ澄ませて何度も挑戦しなければ主題に合った表現が難しい、適度な扱いにくさをもっている。ここで、発想を単純に表現するのではなく、自分の感じ取ったことを大切にしながら表現方法を考えてつくり上げることに集中させたい。

今年度は、写真作品を制作（表現）し、それらを鑑賞し、表現の意図を再度確認してトリ

ミングを行う（再表現）という活動を行い、表現と鑑賞の関連づけを行うことで、美術科の学習目標を達成させようとした。

3 学習目標

- ・日常生活に美術が関わっていることを知り、身近な工芸作品や写真への関心を高め、生活の中に美術を生かすことでよりよい豊かな生活にしていこうとする態度を培う。（関心・意欲・態度）
- ・使用する者の気持ちや機能、造形的な美しさなどを総合的に考え、心豊かに構想を練る（発想・構想の能力）
- ・主題にあった用具や材料、技法を選択し、見通しをもって表現する。（創造的な技能）
- ・益子焼のつくられた目的や、機能との調和のとれた造形的なよさや美しさを感じ取ったり、作品の意図を表現した写真を鑑賞したりすることで、自分の主題を明確にしたり、他者の表現の意図を感じ取る力や思考する力を一層豊かにする。（鑑賞の能力）

4 指導計画

- (1) 導入・鑑賞、主題の決定・・・・・・・・・・ 1 時間
- (2) 制作・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5 時間
- (3) 写真撮影・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 時間
- (4) 鑑賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 時間 総時間数 8 時間

5 本時の指導

- (1) 題目 「 写真は写心 」
- (2) 目標・主題にあった用具や材料、技法を選択し、見通しをもって表現する。
(創造的な技能)

(3) 展開 ア 写真撮影（1 時間）

具体目標	学習活動・内容	指導上の留意点	準備
・学習目標と学習内容を確認する。	1 学習目標及び学習内容を確認する。 学習目標「表現の意図を明確にし、それに合った撮影方法を選ぼう」	・自分の制作した益子焼のよさや表現の意図を明確にするために写真撮影を行うことを理解させる。 ・ゲストティーチャーを紹介し、お話をいただくことで関心・意欲を高める。	参考資料 スクリーン プロジェクター
・デジタルカメラの使い方を理解する。	2 スライドショーを見ながら、カメラの扱い方についての話を聞く。 ・誰が撮影したカメラかを明確にするため、友達と協力しながら自分の顔写真を撮る。	・レンズを破損しないように電源を切って持ち運ぶこと、落下防止のためにストラップを手首に通しておくこと、また、安全には十分注意することを伝える。 ・撮影の工夫点についてアドバイスする。 ○最も伝えたいことが明確になるようなピントの合わせ方をすること ○表現の意図が明確に伝わるように、画面構成を考えて撮影すること	デジタルカメラ
・主題を明確にしながら、写真撮影を行う。	・中庭、校庭、教室など校舎内に移動し、作品の写真撮影を行う。	・撮影する生徒の間を見て回り、迷っている生徒には、作品の形・色・質感、作品にあたる光や陰、作品の影などの造形の諸要素のどこを強調したいのか、背景の何を写さないようにしたいのかについて質問しながら、主題を明確にさせる。	生徒自身の焼きもの
・本時のまとめと、次時の内容を確認する。	4 まとめを行う。 ・様々なシチュエーションで撮影しながら、感じ取ったことについて	・身の回りにある芸術作品・工芸品やその写真を見る時の視点についてふり返らせる。 ・デジタルカメラに親しむことで、生涯、表現することを楽しむ人になってほしいと	ワークシート

る。	てふり返る。	いうゲストティーチャーと教師の願いを伝える。 ・次回、写真を鑑賞することを伝える。	
----	--------	--	--

イ 鑑賞（1時間）

具体目標	学習活動・内容	指導上の留意点	準備
・学習目標と学習内容を確認する。 ・写真撮影した時の、自分の思いや考え、表現の意図を明確にする。	1 学習目標及び学習内容を確認する。 学習目標「作者の心情を写真撮影の視点から読み取ろう」 2 スライドショーを見ながら、撮影した日の様子をふり返る。 ・教師自作のデスケールを用い、参考作品を縦横の比率を1：1，3：4，1：2にトリミングしたときの効果について考える。	・自他の作品の表現の意図を感じ取り、写真撮影の視点から自分の言葉で表現できるようにすることを意識させる。 ・撮影した写真の表現の意図をより明確にするための方法の一つとして、トリミングを行うことを理解させる。 ・撮影中の生徒の様子を、教師側で撮影しておき、どのような体勢・角度で撮影に臨んでいたかを客観的にふり返らせ、教師との対話を通して、表現の意図と表現方法の工夫について明確にさせる。 ・トリミングの効果について考えさせる。 ○最も伝えたいことが強調されるよう、余計な部分をカットすること ○伝えたくない点を省略する為、あえて多くのものが写り込むような構図にする方法等も考えられること	撮影中の生徒を写した写真スクリーン プロジェクター 参考作品 デスケール
・トリミングについて考え、写真としての作品の意図を明確にする。	・デスケールを用いて自分の作品をトリミングする。	・友達と意見交換しながら、最も表現の意図が伝わる構図を探し、トリミングさせる。また、そう感じ取った理由を、表現の意図と絡めてワークシートに記入させる。 ・検討した結果、撮影した時のままの構図が最もよかった場合には、その理由をワークシートに記入させる。	生徒作品 ワークシート
・本時のまとめと、次時の内容を確認する。	4 まとめを行う。 ・様々なシチュエーションで撮影しながら、感じ取ったことについてふり返る。	・作品を鑑賞す時の視点についてふり返らせる。 ・美術の表現と鑑賞を通して、ものの見方や考え方を深めること、形や色によるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわることの重要性についてふれ、まとめを行う。	ワークシート

（4）評価

・主題にあった用具や材料、技法を選択し、見通しをもって表現する。（創造的な技能）
自分の表現の意図を明確にもって、それに合ったアングルや構図、光の当て方をして写真撮影を行っている生徒を B（おおむね満足）とした。また、撮影方法に創造的な工夫が見られたり、トリミングの時にさらによい構図を考えながら表わそうとしていたりする生徒を A（十分満足）とした。

(5) 指導上の具体的な留意点

① 益子焼の作品を制作する前に、第一学年において制作したライトの作品を撮影する活動を行い、立体作品を制作したり鑑賞したりするときの視点を考えさせる

4人一組にしてカメラを一台ずつ渡し、作品が平面的に見える写真と立体感溢れる感じに見える作品の2枚を撮る課題を与えた。

その際、以下の4点に留意させた。

- ・ア角度（どの角度から撮影するか）
- ・イ光と陰影（光の当て方をどの様に工夫するか）
- ・ウ背景（どの場所に置き作品の色とのバランスを取るか）
- ・エ距離（作品とカメラ、見る側の目との距離をどのくらいとるか）

第1学年の最後にスケッチの授業を行い、構図の工夫により主題を強調できることを学んだ後に行ったこと、授業としては初めてカメラを用いた授業であったことから、生徒の関心・意欲は非常に高かった。机の上に置き、斜めから撮影したものだけでなく、影とともに写したものの、フラッシュを当てて陰をとばした写真など、思い思いの作品が生まれ、作品に込められた主題を再表現する面白さを味わわせることができた。

また、このとき意識させた4つの視点は、②の益子焼の作品写真撮影に生きてきた。生徒達は必要に応じて、印象に残っていた視点を思い出しながら撮影に臨んでいた。

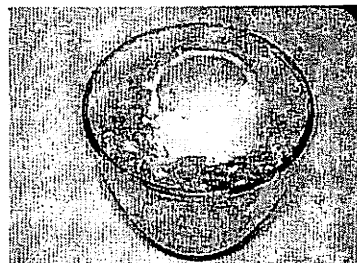


図-5 光を斜めから当てて…



図-6 影をつけて…

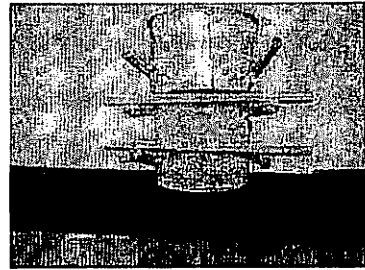
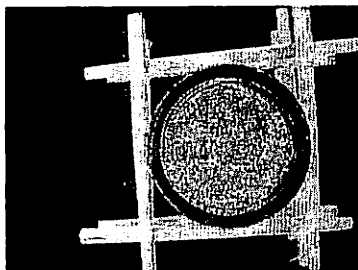


図-7～9 真上から… 斜めから… 真横から… 等、撮影の角度を工夫して撮影した作品

② 益子焼の作品撮影の授業でゲストティーチャーとして、APA に所属するプロの写真家に来ていただき、よいカメラを使って撮影方法を工夫する面白さを味わわせる。

現代では、携帯電話のカメラ機能も実に進歩しており、子ども達自身が写真を撮影する機会が多いが、その撮影時の工夫について学ぶ機会は少ない。ふり返りから、カメラや携帯には多くの機能がついていても活用できていなかったが、これからは工夫してよりよい写真を撮りたいという意見が多数見られた。美術を生活に生かすことへの態度化を進めるきっかけとして有効であったのではないかと考えられる。

また①のライトの鑑賞で用いたカメラは一般的なコンパ

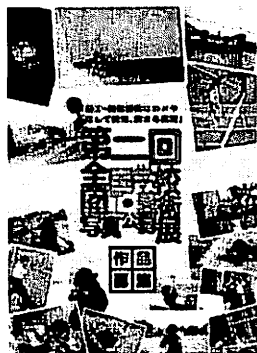


図-10 公募展リーフレット

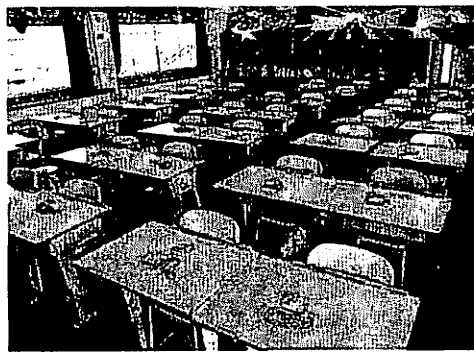


図-11 カメラを配布

クトデジタルカメラであり、接写機能やシャッター速度の変更、ピントの合わせ方・ぼかし方などが思うようにいかない部分があった。しかし、お借りしたカメラでは、そのような機能が使えたため、子ども達の思いがより明確に表現できたり、偶然、意図したよりもっとはっきりした特徴のある写真が撮影できたりしたため、「カメラは、工夫次第でとてもよい表現ができる手段の一つである」という強い

印象を子ども達に与えたようである。また、カメラはレンタルであるため、データの管理を容易にする工夫として、隣の席の生徒と交換し、そのカメラを使用する生徒の顔写真を撮影しておく・最後に氏名と最もよく取れたと感じた写真の番号を記入したカードを撮影しておくといった具体的な工夫も教えていただいた。

さらに、このとき撮影した益子焼の写真は、第二回全国学校図工・美術写真公募展に応募・入選させていただき、作品は東京都写真美術館に展示され、入賞者は表彰されるということもあり、子ども達の興味・関心を高める結果となったと思う。

③なぜそのように感じたか、考えたかを、（伝える相手を意識して）言葉にしながら、自分の表現の意図を明確にしていく。

今回は、写真撮影に多くの時間を割くため、導入時に一斉授業の形態で教師と一部の生徒との対話を通して、言葉を意識して、撮影の視点や主題と表現の工夫について考えさせ、友人とのコミュニケーションやワークシートへの記入の際に意識させる程度に配慮した。

自分の思いを感覚的・瞬間的に表現できる写真に助けられ、後になって主題が明確になったという



図-14 友人の協力を得て撮影する生徒達



図-15 撮影された写真

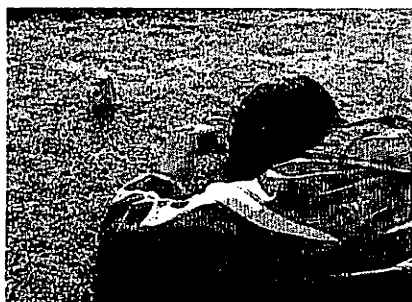


図-16 接写する生徒

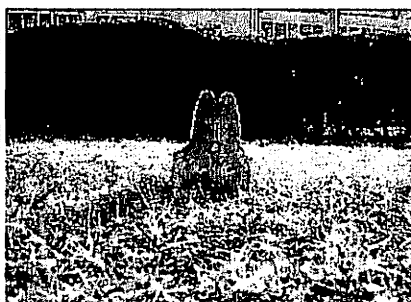
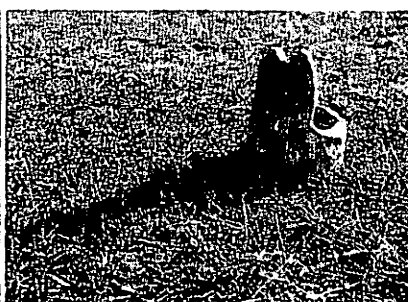


図-17・18 生徒の撮影した作品



生徒も見られたが、多くは、表現の意図を言葉にすることで漠然としていた主題がより鮮明になり、よりよい表現方法を工夫する態度につながったのではないかな。

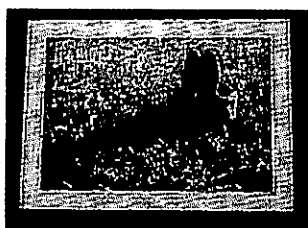
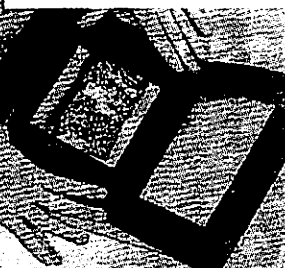
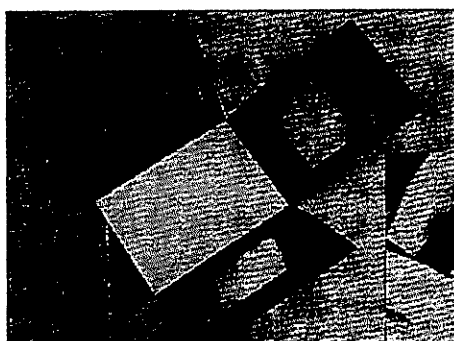


図-19～21 色とりどりの額に入れた生徒作品

益子焼の作品には落ち着いた色味が多いため、①で学んだ視点のうち背景と作品の対比における色彩に関する視点が出にくいのではないかと考え、写真を2Lサイズに焼き、額に入れて展示して鑑賞会を開始したが、写真や絵画などの平面作品は、



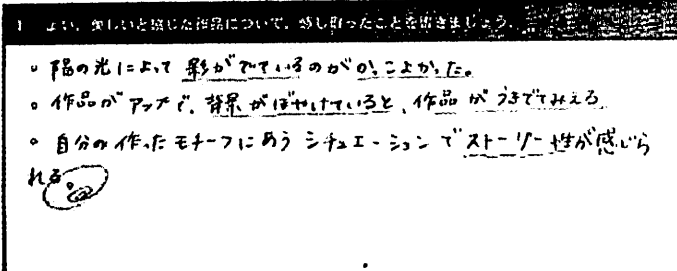
台紙に貼る・額に入れるなどにより、図-22 教師自作のデスケールそのよさがより際だつ。額に入れたことで自分の作品のよさや美しさに改めて気づき、言葉に表せた生徒も多かった。

図-23 1:1のデスケールで構図を考える生徒

空習自覚



作者の心情を写真撮影の視点から読みとろう。



2 自分の心がもっと伝わるようにするために、どんな構図にするとよいだろう
なぜこの構図を選んだかも、書き添えておくこと。

ソムロイイメージ
モチーフをついてから
木の中に入れてみた

日の傾きの人が
うきよかたの
うきよかた



このようにして
みんなが
うきよかた
うきよかた

風景ものの制作・写真撮影
・鑑賞 各ふり通って

光と影、距離、背景がポイント

写真のねを覚えて、初めて、うきよかた、ガラッとイメージが変わった。

図-25 トリミングの活動を行ったときの、生徒のワークシート

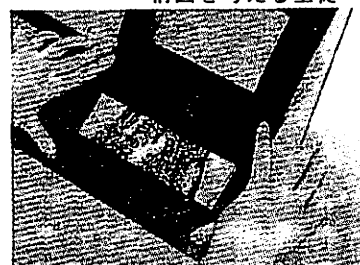


図-24 1:2のデスケールで構図を考える生徒

また、トリミングの際にも、その方がよいと感じた理由を、言葉を意識して考えさせ記載させた。

3 成果と課題

成果としては、写真という表現方法への興味・関心を高められ、造形の視点としての構図や光と陰影の工夫などを自然と身につけさせることができた事が挙げられる。絵の具を用いたスケッチでは、絵筆の扱いに慣れている生徒とそうでない生徒の差が大きく、対象を見つめることよりも、絵筆の使い方と混色の学習に関心が集中してしまったきらいがある。筆の運びや配色に作者の心情が表われる

